



～涙腺崩壊エピソード 受賞 10 作品～

毎年楽しみにしてるクリスマスプレゼント！今年は何かなーと小学2年の息子と会話していると、「どうしてママは、よい子なのにサンタさん来ないの？」と聞いてきました。「大人になるとサンタさんは、忘れちゃうのかもね！」と話すとき悲しそうに顔を赤らめていました。

次の朝、息子がプレゼント届いたーと喜んでいるので、私も起き上がると枕元に、「いつもよい子なのに、わすれちゃってごめんね。サンタより」手紙とロボットのおもちゃが置いてありました。可愛いチビサンタからの、素敵なクリスマスプレゼント、今でも大切にしています。

祖父が X'mas 目前に亡くなったのですが…イベント、お祝い事が大好きだった祖父。お葬式前だし不謹慎かな？とも思いつつも家族で集まる際(23日)次の日イヴということもあり気持ち小さなケーキを買って行ってしまいました。すると…小さなケーキやトナカイのカチューシャ、サンタの髭やらつけて場の雰囲気は少しでも明るくしようとしている家族がそろっていました。みんな悲しいはずなのに祖父の写真の前には賑やかな光景が広がっていました。祖父のことを大好きな皆の気持ちが一つになった X'mas の思い出です！

長女を産んで初めてのクリスマス。

長女の枕元にプレゼントを置いて幸せな気持ちで眠りについた翌日の朝、なんと私の枕元にもプレゼントが！

「お母さん1年目、大変だし忙しいと思うけど、自分のことも大切に」というダンナの字のメッセージカードと、落ち着いた色味のスヌードが入っていました。

全くのサプライズだったので本当に驚いたし、嬉しかったです。

スヌードは10年以上経った今でも大切に使っていますし、あれから毎年、秘密のサンタさんからのプレゼントが届き続けています。

私は、誕生日がクリスマスイブなのですが、独身時代は旅行会社で登山ツアーガイドをしていた為、毎年誕生日はクリスマスツアーでお客様と過ごしていました。

八ヶ岳の山小屋でクリスマスツアーの最中、常連のお客様が山小屋のご主人に私が誕生日だと伝えてくれたようで、全員でハッピーバースデーの歌を歌ってくれました。バンドナのプレゼントまで頂きました。

本物のもみの木にろうそくを立てて神秘的なツリー…私の人生で 1 番嬉しかった誕生日&クリスマスでした！

私が小学生のとき、クラスで編み物が流行り私もマフラーを編んでみました。せっかく作れるようになったから祖母にもクリスマスにプレゼントしたら喜んでくれました。

それから 15 年後、祖母がスクーターに乗るときにそのマフラーをつけてくれていることに気付いて、ずっと大事にしてくれていたんだと思い、私がうるっときました。真っ白な毛糸で編んだマフラーがだいぶ汚れてしまっていたけど、それでも使い続けてくれていた祖母の気持ちが嬉しすぎました。

昨年のクリスマス 2 週間前に人生初彼女ができた。「クリスマスに初めて彼女という存在の人と過ごせる」と私は楽しみにして、仕事も有給を取った。そして、その日はイルミネーションを見て、クリスマスプレゼントを渡すというサプライズを考えていた。しかし、その当日の朝私は交通事故に遭ってしまった。幸いケガは軽症で済んだが車は故障してしまい、サプライズができなくなってしまった。

落ち込みながら彼女の家に向かった。そこには、私が欲しかったトレーナーを手に持っていた。逆にサプライズをされてしまった。最高の彼女だ。

付き合って 3 年になった頃のクリスマスの日。もうそろそろお互いに結婚を意識していた時。今年は何かあるかなと期待してデートしていました。しかし、期待していたものは何もなく、しょんぼり家に着き、車から後ろにあるバックを取ろうと、あれ？何か手紙のようなものが。

なんとプロポーズの手紙でした。彼は口では言えない性格で、そこにはシンプルに、結婚して下さいと書いてあり、じわっとうれし涙がでたのを今でも鮮明に覚えています。幸せなクリスマスでした。

昨年 1 月に亡くなった母は小さい物が大好きでした。昭和の時代お菓子のおまけの小さな家具等のおもちゃ、旅行先で見つけた小さな飾り物、それをセンス良く飾る事も得意な母でした。84 才で癌がわかり緩和病棟での最後のクリスマス、看護師さん達が用意してくれた小さな小さなクリスマスケーキ、食道癌の為食べる事は叶わなかったけど小さなケーキを愛おしそうに微笑む写真が母の最後の写真になりました。

父が亡くなったのは 11 年前の 12 月 25 日。3 ヶ月の闘病生活でした。病院から家に帰って来た父の祭壇横に、当時 8 才の娘が何かを持って立っています。そと枕元に置いたそれは、大好きなじいちゃんへの Xmas プレゼントの靴下と『早く治ってね』と書かれたカード。娘はじいちゃんが病気で寒いと言っていたからサプライズでプレゼントをしようと、自分のお小遣いで一足の靴下を買っていたのです。最後まで治ると信じていた娘のプレゼントは生きている内に渡せませんでしたが、最愛の孫娘のプレゼントを持ち、父は天国へ旅立ちました。

今から 37 年前のクリスマスイブのお話です。主人と初めてのデートでした。主人は群馬、私は東京で遠距離恋愛でした。銀座で待ち合わせ、約束の時間が 1 時間過ぎても来ない主人。携帯電話がない時代、主人は必ずくると寒い中ひたすら待ってました。すると、猛ダッシュで向かって来る人がいました。主人でした。寒いなか、走ってきて真っ赤な鼻になってました。大きな赤い袋を持って、まるでサンタクロースのようでした。東京がよくわからなくて、迷いながら、でも必死にきたようです。「遅れてごめん」と赤い袋のプレゼントをくれました。